



## インドネシアの伝統的影絵ワヤンを活用した啓発活動

ストップ結核パートナーシップ日本



文化公演欄

新様式の薬ワヤン、益々ダイナミックに マハルディニ・ヌルアフィファール  
(ソロボス、第1面から13面に続く。2014年2月24日)

先月のスラムット・グンドノ逝去後、薬ワヤンは再び活動を再開した。一番前の機関車はもういないが、普段はダランの脇で活躍していた上演補佐役の車両が前に進み出ることになった。

ソロのスリ・ウグリで日曜日(2/23)に「グノデウォの回復」という演目で上演されたマルチメディアの薬ワヤンは、このコミュニティ復活の最初の礎(いしづえ)となった。同じ文化のゲリラ士気を掲げ、この上演は薬ワヤンの特徴を失っていない。薬ワヤンの特徴とは、一つの上演の中で、現実や健康問題とワヤンとの壁を突破することである。

趣旨が同じとはいえ、醸し出される雰囲気と同じというわけではない。かつてスラムット・グンドノは主役で、1人で語り、劇を演じ、歌うダランだった。この地位が、今や継ぎ当りで補填されようとしているのだ。新様式の薬ワヤンには、益々ダイナミックに見える。

ダランとしてはキ・ワルヨが皆の信望を集めた。音楽は薬ワヤンコミュニティの仲間が演出した。この上演にスパイスを加えるために、マクス・バイハキ、ドゥル・スピン、ハニダワンなどの経験豊富な芸術家が招待された。

「グノデウォの回復」という演目は、社会に結核についての自覚を促すため、公衆の場所で上演された。スラムット・グンドノは、亡くなる前に薬ワヤンコミュニティと共に、非営利団体であるストップ結核パートナーシップ日本とインドネシア結核予防会ソロ支部により結核予防の使者として指名される栄を得ていた。

キ・ワルヨは、上演の初めに、ワヤン・グレットとワヤン・クリットの両方を上演できる携帯用ワヤンセットに乗って登場した。トゥガル出身のこのダランは、グノデウォの背景を描く場面に繰り広げた。彼は身体中に毛が生えていた上、うつる病気に罹っていて不吉と見做されたため、隔離されていたと語られる。

薬ワヤンチームの核となる人物、ホンゴ・ウトモは、この上演がスラムット・グンドノの遺稿に基くものであると語った。「殆ど全部書いてあって、終幕だけがまだだった。今回は、チームの合意のもとに、グノデウォが回復するように演出した。」上演の合間の言であった。



ソロボス 2014年2月24日